

連載

刀剣の歴史と思想

第9回

酒井 利信

天より降る剣 詩靈剣

日本には古代「**二大靈劍**」といわれるものがある。

詩靈剣と**草薙剣**である。

この二つの靈劍が主となり、日本刀剣思想を根底から突き動かすこととなる、神話的イメージを作っていく。

古代日本において、当時、羨望の眼差しで見られていたこの二つの靈劍が、記紀神話の冒頭で整えられた神話世界で活き活きと躍動する。

先ずは、剣神タケミカヅチと一心同体ともいえる詩靈剣の活躍を見ることからはじめたい。

▼天より降る剣神タケミカヅチと國譲り神話

詩靈剣を語るには、まず國譲り神話から話をはじめなくてはならない。

ここでは既に述べたように、天上界である高天原と下界である葦原中國とからなる神話世界が前提となつていて。

高天原を統治するのは、天上界の最高神である天照大神である。天照は、天上界

のみならず下界である葦原中國をも自らの子孫に統治させようと考える。しかし葦原中國は、荒ぶる神が大勢いる騒がしいところで、**大国主**（おおかみぬし）という国つ神が統治するところである。まずはこれを平定しなくてはならない。そこで天照は、**高御産**（たかみうぶ）**日神**（ひのかみ）（別名、高木の神）らと相談をして、アメノホヒにつづいてアメノワカヒコといつた使者を一度も遣わすのであるが、アメノホヒは大國主に媚びて帰らず、アメノワカヒ



刀剣の歴史と思想

天より降る剣 神靈劍

是を以ちて此の二はしらの神、出雲国
伊那佐の小浜に降り到りて、十掬劍を抜
きて、逆に浪の穂に刺し立て、其の剣の
前に趺み坐して、其の大國主神に問ひて言
りたまひしく、「天照大御神、高木神の命
以ちて、問ひに使はせり。汝が宇志波祁
流葦原中国は、我が御子の知らす国ぞと言
いさし賜ひき。故、汝が心は奈何に」との
りたまひき。

天照の命で天上から下界へ向かつたタケ

鹿島神宮の祭神
香取神宮の祭神

コは大国主の娘を娶り自らがこの国を奪おうと謀るなど、派遣はことごとく失敗におわる。そして三度目に遣わされた使者が、火神の神話で誕生した剣神タケミカヅチである。

タケミカヅチは、『古事記』によればアメノトリフネを従えて、『日本書紀』によればアツヌシと共に、大国主にこの国の統治権を譲るよう交渉しに下界へ降りていく。いわゆる国譲り神話である。

以下、『古事記』の記述をあげて詳細を見ていただきたい。



切先に座すタケミカヅチが描かれた絵（鹿島神宮蔵）

ミカヅチは、出雲の国の伊那佐の小浜に降り立ち、もつていた十掬劍を抜き放つて切先を上に向け、波の穂がしらに柄を下にして突き刺した。この「十掬劍」とは、『古事記』で他に「十拳劍」と記されているものと同様と考えて良い。既に述べたが、『日本書紀』では「十握劍」と表記されているもので、握り拳十個分もある長大なものであり、当時としては実に見事で立派な剣のことである。タケミカヅチは、この剣の切先の上に胡座をかけて座る。実に衝撃的な登場の仕方である

が、剣の上に胡座をかくという描写は、神の憑代としての剣の神聖性を表している、あるいはタケミカヅチが剣と一心同体であること表現していると理解できる。いずれにせよ非常にマジカルな描写である。そしてタケミカヅチは、次のように

大神と高木神の仰せによつて遣わされた者である。大神は、お前が領有している葦原中国は、我が御子が統治するべき国であると言っているが、お前の意思はどうか」と。大国主に、葦原中国の統治権を譲る意思があるかどうかを迫る描写である。

これに対して大国主は、自分の跡を継いだ我が子であるコトシロヌシに聞いてほしいと答える。タケミカヅチはアメノトリフネを遣わしてコトシロヌシを呼び寄せ、改めて尋ねたところ、あつさりと「恐れし。



此の国は、天つ神の御子に立奉らむ」（恐れ多いことです、この国は天つ神の御子に奉りましよう）と言つて、自らは天の逆手という呪術により身を隠してしまつた。ここまで平穩に國譲りが承諾されたかというと、この話には実はもう一波乱ある。大国主が言うには、もう一人タケミナカタという息子がいるという。以下、「古事記」の記述である。

其の建御名方神、千引の石を手木に擎げて來て、「誰ぞ我が國に來て、忍び忍びに如其物言ふ。然らば力競べ為む。故、我先に其の御手を取らむ」と言ひき。故、其の御手を取り成し、即ち立氷に取り成し、亦剣刃に取り成しつ。故爾に懼りて退き居りき。爾に其の建御名方神の手を取らむと乞ひ歸して取りたまへば、若葦を取るが如、縫み批きて投げ離ちたまへば、即ち逃げ去にき。

そのタケミナカタが、千人がかりで引くほどの大岩を手先に軽々とさしあげてやつて来て、「誰が私の国にきてこそと話を

しているのか。わたしと力くらべをしないか。受けるならば私が先にあなたの手を掴もう」といい、タケミカヅチは自らの手を立氷（氷柱）に変え、またすぐに剣の刃に変えた。立氷は剣の刃の透明で深い輝きを表現したものか、この描写はタケミカヅチが剣神であることを強烈に主張している。そして懼れて退いたタケミナカタの手を掴んで、まるでやわらかい若葦を掴むようにして投げてしまつた。これには堪らずタケミナカタは逃げて行つた、という内容である。

この後、タケミカヅチは、科野の国（信濃國）の州羽（諏訪）の湖までタケミナカタを追い詰める。そこでタケミナカタは、ついに「此の葦原中國は、天つ神の御子の命の隨に獻らむ」（この葦原中國は、天つ神の御子に獻上しよう）と言う。

息子たちの意思をうけて、大国主はどうとう國譲りを承諾する。

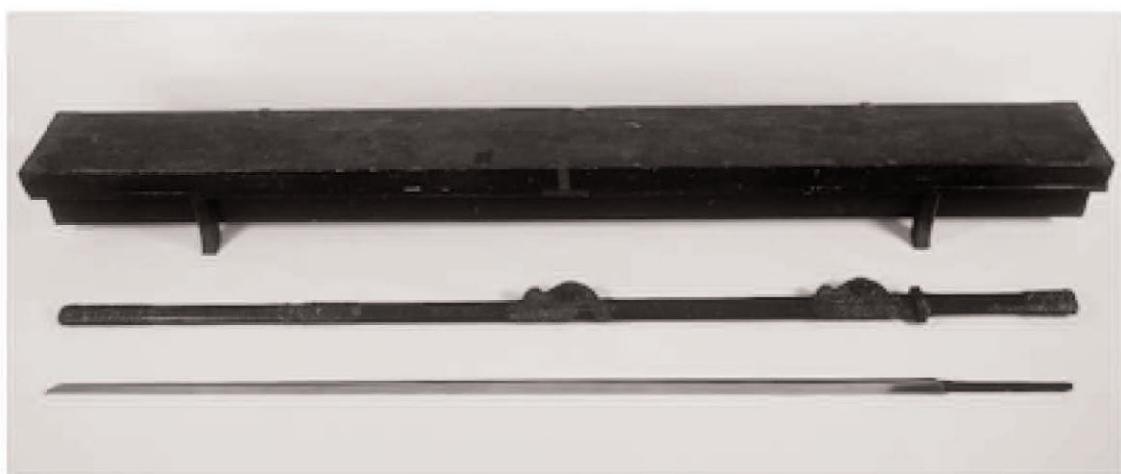
そして、次のような記述で締めくられ

をしているのか。わたしと力くらべをしないか。受けるならば私が先にあなたの手を掴もう」といい、タケミカヅチは自らの手を立氷（氷柱）に変え、またすぐに剣の刃に変えた。立氷は剣の刃の透明で深い輝きを表現したものか、この描写はタケミカヅチが剣神であることを強烈に主張している。そして懼れて退いたタケミナカタの手を掴んで、まるでやわらかい若葦を掴むようにして投げてしまつた。これには堪らずタケミナカタは逃げて行つた、という内容である。

この神話では、天上と地上、天つ神（高天原の神）と国つ神（天孫降臨以前から葦原中國に土着していた神）という対立した相が設定され、これを繋ぐ役を担つてタケミカヅチという神が活躍する内容である。ここでは、このタケミカヅチが剣神であるということが強烈にアピールされている。このことは、降臨してくるなり剣の切先に座るというセンセーショナルな登場の仕方や、タケミナカタとの争いにおいて手が剣に変じたことなどに窺われる。ここでのタケミカヅチは、どちらかというと剣と一
心同体である。この神と靈剣が別々に活躍するということはない。

最後にタケミカヅチは天上界に昇り返つて、天照大神らに葦原中國を平定したこと段として、必要かつ重要な神話である。

以上がいわゆる國譲り神話であり、天照大神の子孫である天孫が下界を統治するために降臨していく、いわゆる天孫降臨の前段として、必要かつ重要な神話である。



「直刀（詩靈剣）」・国宝（鹿島神宮蔵）

ここでの主役はあくまでも剣神タケミカヅチであり、本稿の中心となるべき詩靈剣はその名前さえ出てこないが、この後、詩靈剣が神話の中で活躍するためにはこの国譲り神話が前提として非常に重要な役を担つて登場するのは、神武東征神話を待たなくてはならない。

▼▼天より降る靈剣、**詩靈**
△神武東征神話△

神武東征神話とは、初代天皇といわれるカムヤマトイハレビコ（神武）が日向を出发して東へ東へと国土を平定し、大和國の櫛原宮で即位するまでの伝承を描いたものである。

神武東征神話とは無関係ではなく、国譲り神話によって平定された下界である葦原中國に天照大神の子孫である天孫が降臨し、この天孫と血統上のつながりを持つものが代々天皇である、と神話上はされている。その系列にある初代天皇が、カムヤマトイハレビコ（神武）ということであ

る。（註）

以下、神武東征神話の内容を見ていきたいと思う。神武はこの東征の最中、さまざまに遭遇するが、熊野に到った際、最大の窮地を迎える。『古事記』の記述をベースに見ていきたい。

故、神倭伊波礼毘古命、其地より廻り幸でまして、熊野村に到りましし時、大熊髮かに出で入りて即ち失せき。爾に神倭伊波礼毘古命、倏忽かに遠延為し、及御軍も皆遠延て伏しき。

カムヤマトイハレビコ（神武）が熊野に着いたときに、大きな熊がふと現れたかと思うとすぐに姿を消した。すると神武は、たちまち正氣を失い倒れてしまう。彼の軍隊もみな倒れてしまつた。大熊とは荒ぶる神の化身であり、この毒気に当たつて倒れたのである。国土統一も成就しないかとう、絶体絶命の窮地である。

しかし神武は不思議な靈剣の靈威によつて、この窮地から逃れることとなる。





タケミカヅチの木像（鹿島神宮蔵）

此の時熊野の高倉下、一ふりの横刀を賣
ちて、天つ神の御子の伏したまへる地に
到りて、献りし時、天つ神の御子、即ち寤
め起きて、「長く寝つるかも」と詔りたま
ひき。故、其の横刀を受け取りたまひし時、
其の熊野の山の荒ぶる神、自ら皆切り仆
さえき。爾に其の惑え伏せる御軍、悉に
刀(さき)を持つてきて神武に献上したところ、
寤め起き。

不思議なことにこの天つ神の御子は「長く寝てしまつたことだ」と言つて起き上がつた。この刀剣を受け取つた時、熊野の荒ぶる神は自然と斬り倒されていたという。そして神武の軍隊もみな正氣を取り戻し起き上がつた。

実に不思議な力をもつ刀剣であるが、この剣の正体を説明する記述が続く。

す、其の横刀を獲し所由
高倉下答へ曰しつく、
「己が夢に、天照大神、
高木神、二柱の神のみことも
命以ちて、建御雷神
を召びて詔りたまひけ
らく、「葦原中国は伊多玖佐夜芸帝阿理那
理。我が御子等不平み坐す良志。其の葦原中國は、専ら汝が言向
けし國なり。故、汝建御雷神降るべし」との
りたまひき。爾に答へししく、「僕は降ら

すとも、専ら其の国を平けし横刀有れば、是の刀たちを降すべし。此の刀を降さむ状は、高倉下の倉の頂むねとうを穿うがちて、其れより墮おちし入いるれむ。故、阿佐米余玖汝あさみよくなれ取り持ちて、天つ神の御子みこに獻まつれ』とまをしたまひき。故、夢の教の如さまに、旦あしたに己おのが倉を見れば、信まことに横刀有りき。故、是の横刀を以ちて

神武が、この刀剣を得た経緯を聞いたところ、高倉下が答えて言うには次のような内容である。夢の中で、天照大神と高木の神がタケミカヅチを呼んで言うには、「葦原中國がひどく騒がしいようだ。私の御子たちも苦しんでいるらしい。この葦原中國はそもそもそなたが平定した国であるから、タケミカヅチよ降りて行け」と。天照からタケミカヅチに、下界の神武を救うようという命令である。しかしタケミカヅチが答えて言うには、「私が降らなくても、その国を平定した刀剣がありますから、これを降しましよう。この刀剣を降す方法は、高倉下という人の倉の屋根に穴を開け、そこから落とし入れるのがいいでしよう」と。

➤ 神武天皇即位BC.660の謎

➤ 弥生の神（稻作と金属器を持った大陸の神）
と縄文の神

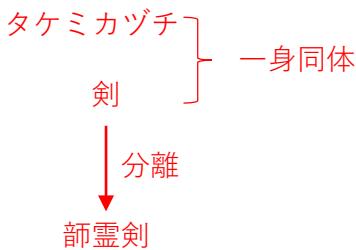
刀剣の歴史と思想

天より降る剣 詩靈劍

そして高倉下に、「朝日が覚めたらお前が
その刀剣をもつて天つ神の御子である神武
に献上せよ」と告げた。ここまでは夢の中
の話である。そして夢の教え通りに翌朝
倉を見ると、本当に刀剣があつたので、こ
れを献上したというのである。

この刀剣について『古事記』には「此の
刀の名は、佐士布都神と云ひ、亦の名は甕
布都神と云ひ、亦の名は布都御魂と云ふ」
と注記されており、『日本書紀』には「号
を師靈と曰ふ」と記されている。この靈
剣が一般にいわれている剣靈剣であ
る。

ここにきて初めて、国譲り神話において



▼▼中国思想との接点として 日本思想の起点

葦原中國を平定すべく、タケミカヅチが切
先に胡座をかいて座つたあの刀剣が、師靈
剣と結びつくこととなる。

国譲り神話において一心同体であつたタ
ケミカヅチと剣が、ここでは完全に分離し
て師靈剣が主役として活躍しているところ
に一つの特徴がある。

古代中国の刀剣思想では、天命の思想か
ら神聖視された星を直接彫りこむことによ
つて剣は神聖なものとされた。これを古代
朝鮮においては、金庾信の伝説に顯著なよ
うに、星の光芒が天上から剣に降りてくる
ことによつて剣は神聖なものとして觀念さ
れていた。これが神武東征神話においては、
神聖なる剣自体が神々の世界である天上か
ら降りてきて、地上でマジカルな力を發揮
する。

古代中国から朝鮮、そして日本へと流れ

非常によく似ている。靈剣の靈威の根柢を
天に求める、同種の思想が含まれている
ことは明らかである。

古代中国の刀剣思想では、天命の思想か
ら神聖視された星を直接彫りこむことによ
つて剣は神聖なものとされた。これを古代
朝鮮においては、金庾信の伝説に顯著なよ
うに、星の光芒が天上から剣に降りてくる
ことによつて剣は神聖なものとして觀念さ
れていた。これが神武東征神話においては、
神聖なる剣自体が神々の世界である天上か
ら降りてきて、地上でマジカルな力を發揮
する。



高天原（神々の世界）

国譲り神話

神武東征神話



神話時代

葦原中國（人間界）

歴史時代

る大きな思想的系譜があり、この神武東征神話における師靈剣の伝承は、古代における中國大陸と日本の思想的な接点であるといつてよい。

そしてもう一つ、この神話には重要なポイントがある。

日本神話を俯瞰してみると、神話に時間軸があるとすれば、天地創世の神話から神々の事跡を語る神代を経て人の歴史を語る人代へと流れていく過程で、天と地の精神的な距離が広がっていく傾向があるようだ。つまり神代の最初は、天上と地上、神々と人間の区別があまり明確ではなく、神も天上と地上を行き来する。しかし、神話時代から歴史時代に向かつてこの区別が徐々に明確になっていくようである。このことは、神代中期に位置する国譲り神話において、タケミカヅチが自ら天上界から下界に降りて行つたのに対し、神代と人代のちょうど境目にあたる神武東征神話においては、自らは降りて行かなかつたことに顕著に窺われる。タケミカヅチは勞を惜しんで天上界に居残つたのではなく、既にこの時期の神話世界においては神も天上から

地上へと降りて行けないぐらいその区別が明確になっていたということである。しかし、師靈剣というこの靈剣だけは降りて来られる。神でさえ行き来が不可能はほど明確な境界があるにもかかわらず、天地を繋ぐことができるということがこの靈剣の神聖性の最たるところである。この思想構造は、後の日本刀劍思想の基礎となるものである。

剣が天から地上に降りてくるなどという現実離れた話であるが、これが古代日本人の精神世界を忠実に表現したものであることは確かであり、この荒唐無稽さが日本刀劍思想の一つの特徴でもある。また、剣の神が神話で活躍し、これが思想的に大きな影響力をもつなど、とても合理的あるいは具体的などといったことからは程遠い、抽象的な象徴性もまた特徴である。日本人は、古今こういつた曖昧性を非常に好むようである。

広く東アジアにおける刀劍思想の流れを踏襲しつつ、既に日本的な独自性をも持ち合わせ、その後の日本刀劍思想において最も基盤となる思想構造を作り上げていると

天地を繋ぐ靈剣

ころに、この神話における師靈剣の伝承の重要性がある。

その意味で、神武東征神話にみられる刀劍思想は、中国思想との接点であり、そして日本思想の起点でもあるといえる。

〔註〕

- (1) 「日本書紀」では大己貴となつてゐる。
- (2) そのため文中、カムヤマトイハレビコのことを「天つ神の御子」というよう記している。

〔註〕

- (3) 「古事記」や「日本書紀」に記される記紀神話においては、「剣」「御刀」「刀」「大刀」「横刀」などの語がみられるが、古代日本において「たち」といった場合、これは「刀」（片刃）「剣」（両刃）の総合名称であつた。
従つて、この記述の「横刀」あるいは「刀」も総合名称としての刀剣を意味し、さらに「日本書紀」における神武東征神話の件ではすべて「剣」と記されていることから、これは刀剣のうちの剣（両刃）と解してよい。



注意